地域のみんなが支え合う 冬月荘が見せる新しいコミュニティづくり

北海道の元気！NPO訪問

1 NPO法人地域生活支援ネットワークサロン

文・加藤知美

◇ 活動の最前線「冬月荘」

釧路市内にある「コミュニティハウス冬月荘」では、筆者が取材に訪れた日、この春中学を卒業した子どもたちが卒業を祝う会を大はしゃぎで楽しんでいた。昨年夏から三四回にわたって定期的に集まって勉強をするなどして過ごしてきた「Ｚっと！Ｓｃｒｕｍ」の仲間だ。名称のＺには、「絶対合格」とか「実家のようなところ」の意味がこめられている。生活保護を受けている家庭や母子家庭の子どもが多いが、チューターである冬月荘のスタッフや大学生、社会人の応援をうけて高校入試に挑んだ。正確に言えば、チューターもまた子どもたちから多くのことを学び、感じとり、鍛えられていた。

この日、子どもたちはテンションがあがりっぱなしだったが、スタッフによれば、「むしろ痛々しい」という。当初は大人を冷ややかに見るようだった子が大きく変化し心を開くようになったそうだが、それは、この場所が数少ない自然体でいられる空間だということを示しているのだ。子どもも大人もお互いにその存在を認め合い、自分を待っている人がいて自分が待っている誰かがいる場が、子どもたちに大きな安心感をもたらした。実家のような、という形容もそのとおりで、大広間で思い思いに過ごしたり廊下を走り回ったりして、まるで親戚が大勢集まっている会合のようだ。

コミュニティハウス冬月荘は、「ＮＰＯ法人地域生活支援ネットワークサロン」が企業の社員寮だった建物を買い取り、二〇〇七年八月に開設し、モデル的に事業を進めている。「居住支援」「日中活動支援」「仕事づくり」を柱に、地域に住む誰かが誰かを常にサポートし、サポートされることで、一人ひとりの生きがいや自分らしさを見つけていくことを目指している。関係者たちは「ここは私たちの活動の最前線」という。特徴的なのは、高齢者・障害者といった福祉の枠にとらわれずに地域の誰もが利用対象であることだ。

◇ はじめにニーズありき、事業の多彩な展開

ＮＰＯ法人地域生活支援ネットワークサロンは、障害児の親や支援者の集まりの「マザーグースの会」を母体に、二〇〇〇年四月に発足した。事業が次々と広がり、現在は正職員やパート、障害をもって働いている人たちなどあわせて約一二〇名が一五カ所あまりの拠点で仕事をし、介護や介助、居場所の提供など多種多様な活動で年間三億円の売上がある。

ここまで大規模なＮＰＯになったのには理由がある。すべてはニーズから始まり、必要だと訴えた人、家族、スタッフ、専門家、協力してくれる行政の人などみんなで最善のかたちを考えてきた結果、年々活動が広がった。例えれば、地中に埋もれたニーズを栄養として吸い上げて枝葉を広げていった大きな樹ということだ。

ここでは、介護保険制度、障害者自立支援法などによる福祉制度を起点にサービスが考えられるのではなく、「あったらいいな」という声から活

15事業所を支える法人本部事務所

動が組み立てられる。財政的に苦しいことでも、とにかく始めてみる。すると、あとから制度が整い、ようやく収支のバランスがとれるようになる。国や市の制度を巧みに使い分けて、利用者本位のサービスを提供している。行政がつくる制度はそれぞれに目的があり対象範囲が限られるため、大半の人に有効であっても、必ず制度の狭間に陥る人がでてくる。そうした部分を拾い上げていくところがいかにもＮＰＯらしい。

たとえば、地域生活支援ネットワークサロンが運営する事業所のうち、子ども家庭支援だけをみても、障害を持つ子どもたちが放課後を過ごす児童デイサービスを提供する「ぽれっこ」、特別な手続きがなくても利用できる地域活動支援センター「親子の家」、気軽に行って親子で食事ができるカフェ「えぷろんおばさんの店」など多岐にわたり、本人が選び取ることが可能な状態がつくりだされている。

◇　試行錯誤と工夫を続ける組織マネジメント

冬月荘では親子でランチの利用も盛ん
（グループでも1組でもOK。要予約）

地域生活支援ネットワークサロンはＮＰＯとしては大所帯の組織であるため、事業所間のコミュニケーションやクレーム対応情報の共有化などにも工夫をこらしている。組織内にサービス向上委員会を設置し、企業でいう社内報にあたる広報誌『千枚のとびら』を発行して、事業所スタッフの声や過去の活動を振り返るコラムなどを掲載している。ちなみに、タイトルのネーミングは、さまざまな利用者たちの心の扉を丁寧に開いていくことの難しさ、大切さをあらわしているそうだ。バックナンバーをたどっていけば、組織がカタチを変えながらも地域の問題解決に向けて最適のやり方を試行錯誤してきた経過がよくわかる。

理事で事務局の内田祥二さんは、「組織は生き物」と言う。福祉の制度が変われば理事会や事業所・職員間での議論を経て必要に応じて組織の組換えをする。一つの事業所を分割して機能を分けたり、独立したり新たに別法人を作ったりする人たちのお手伝いをすることもある。ＮＰＯのマネジメントに必須といわれているミッションの共有にはこだわらない。日常の仕事を通じて理解すればよく、地域に必要なことを実践し、広げていくことが大事なのであって、組織の理想を果たすことが目的ではないからだ。

◇　広域的な配慮と子ども支援の拡充をめざす

一人ひとりのニーズからサービスを生み出してきたが、釧路管内全体を見回せば、まだまだ届かない地域も多い。受けたいサービスが地元にないため、釧路市にわざわざ来ている人もいる。地域生活支援ネットワークサロンでは、情報やノウハウの蓄積を活かして釧路・根室地方全域で積極的に相談に応じている。利用者のニーズに耳を傾け、周辺市町村のＮＰＯ法人や社会福祉法人、医療法人、行政機関を結ぶ役割を果たす。

釧路は生活保護世帯が多く、市も受給世帯の自立に力を入れているが、とりわけ母子世帯の受給率が高い。事務局代表を長くつとめ、現在は事務局顧問の日置真世さんは、「負の再生産を止めたい」と、子どもの支援の必要性を痛感している。むろん大人の自立支援も大事だが、長い目でみれば子どもたちが自信をもって生きていけるようになることが大きな意味をもつということだ。なぜなら、生活保護世帯の子どもたちは「アルバイトしてもどうせ保護費を減らされる」と考え、中高校生の段階であきらめ感に支配されてしまっている。頑張れば気持ちがよいことを実感でき達成感を味わえれば、自ら生活を切り開いていく力が育つはずだ。日置さんは、コミュニティハウス冬月荘での高校生を対象とした活動も究極には学校をつくることになると予感している。

◆　ＮＰＯ法人地域生活支援ネットワークサロン
所在地　釧路市浦見四－二－三
ＴＥＬ　０１５４－４４－５５２７
ＷＥＢ　http://n-salon.org/

加藤知美　プロフィール
横浜市出身。ＮＴＴ勤務を経て、一九九二年一二月、全国初のコミュニティＦＭ放送局ＦＭいるか（函館）の開局に関わる。二〇〇二年～〇五年、株式会社さっぽろ村ラジオ代表取締役。現在、市民メディアやＮＰＯの広報をフィールドに活動。北海道ＮＰＯサポートセンター理事、ＮＰＯバンク事業組合理事も務める。